

主語の有情・非情性と他動詞文の表現事態

崔 瑞 暎*

(e-mail : gogosoyon@naver.com)

<目次>

- | | |
|---------|---------------------|
| 1. はじめに | 3.1. Aタイプ(結果含意タイプ) |
| 2. 先行研究 | 3.2. Bタイプ(結果非含意タイプ) |
| 3. 考察 | 4. むすび |

キーワード：主語(subject), 有情(animate), 非情(inanimate), 他動詞(transitive verb), 因果関係(causation)

1. はじめに

日本語の他動詞文には、「花子が大根を切った」「太郎が折り紙を折った」のように、人名詞が主語に来るものもあれば、「花子の励ましの言葉が落ち込んでいた太郎を勇気づけた」「梅雨前線が暴雨をもたらした」のように非情物名詞が主語に来るものもある。

他動詞文をめぐっては形態・統語・意味的な特徴、自動詞文や使役文との相互関係など多くの研究がなされているが、研究の対象が人主語の他動詞文に偏っている傾向がある。言い換えれば非情物主語の他動詞文を対象に含めて主語の有情・非情性を軸にした他動詞文間の比較分析は充分になされているとは言えない。非情物主語の他動詞文の研究が遅れている背景には、従来、非情物主語の他動詞文は人主語の他動詞文に比べ、使用頻度が低く用例を収集しにくいという認識があったかもしれない。一昔前は「非情物主語の他動詞文は本来の日本語には存在しなかった」と指摘されることもあったが(藤井(1971)、吉田(1971)、外山(1973)など)、最近ではこうした主張に対して批判的な研究も出てきており(代表的には青木(2006)¹⁾)、日本語には自然な非情物主語の他動詞文が少

* 韓国外語大学, 講師, 現代日本語文法

なからず存在していると指摘する研究も増えてきた(金子(1990)、佐藤(1990)、角田(1991)、熊(2009)など)。文学作品(小説や随筆)や社会書籍、新聞・雑誌など言語資料を調べてみると、非常に広範囲にわたって非情物主語の他動詞文を確認することができる。主語の有情・非情性を基準にすると、非情物主語の他動詞文は人主語の他動詞文とともに他動詞文の二つの柱を成すものであり、他動詞文の全体像を説明するためには必ず人主語の他動詞文との比較分析が求められる領域である。

本研究では他動詞文をめぐる先行研究の欠落部分を補うために、主語の有情・非情性を基準にした他動詞文間の比較分析を行う。具体的には人主語の他動詞文と非情物主語の他動詞文がどのような事態を表現するのかを、目的語の結果含意の有無を基準とした事態の特徴及び主語の有情・非情性による動詞の意味の変化に注目して考察する。

最後に考察の資料について述べる。本稿では分析の客観性を保つため実際の用例を収集して考察する。分析の資料としては、日本の文学作品、社会書籍から、人主語の他動詞文300例と、非情物主語の他動詞文300例(総600例)を収集して用いる。1つの書籍からは人主語の他動詞文と非情物主語の他動詞文を同じ数を収集し、用例が特定作家や特定作品に偏らないようにする。人主語の他動詞文よりは非情物主語の他動詞文の出現頻度が低いので、非情物主語の他動詞文の用例数に合わせて人主語の他動詞文も出現順に収集した。また本稿の考察では、目的語の結果含意の有無が重要であるため、従来の先行研究で結果含意の判断基準が設けられている他動詞(主に和語の有対他動詞と無対他動詞)のみを対象にし、「～を 漢語・外来語＋する(例：道路を拡張する)」構造や「～を ～くする・にする(道路を広くする)」などは対象から除いた。

2. 先行研究

本章では本稿と関わる先行研究として、他動詞文と使役文が表す一般的な表現事態(早津(2004))、有対他動詞と無対他動詞の違いによる結果含意性と他動性(宮島

1) 青木(2006:280、285)では「原因主語他動文(非情物主語の他動詞文。括弧内は引用者)は、上代から中古における漢文・和文の資料にある程度見られるもので、近代の欧文翻訳において何も無かったところに全く新しいものを作り出したわけではなく、既に日本語に存在する構文に基づき用法を拡張させたものである」と述べながら、以下のような上代、中古の作品の例を挙げている。(1)は和文資料の例、(2)は漢文資料の例である。

(1)吹き迷う深山おろしに夢さめて涙もよほす滝の音かな(源氏物語・若紫)

(2)第一には是の経は、能く菩薩の未発信者を令て、菩提の心を発さしむ(無量義経古点・335)

(1985))、非情物主語の他動詞文が表す表現事態(熊(2009))に関する研究を紹介する。

①早津(2004)

早津(2004:138-139)では、他動詞文と使役文がどのような事態を表現するのかについて、主語が目的語の動作や変化(結果)を惹起するか否か(以下の<表1>のaとbの区別)、惹起する場合(a)それはどのような事態であるか(a-1、a-2、a-3の区別)によって分類・考察している。以下では本稿の考察対象と関わる内容を中心に<表1>に要約する。使用用語と関連して付け加えると、早津(2004)では「人」名詞以外を「物や事」「事物」名詞と称しているが、これは本稿で「非情物」名詞と呼んでいるものと同じである。また、早津(2004)では人の「意志動作」の反対の意味で人の生理変化や心理変化のような状態変化を「無意志動作」と呼んでいる。

<表1> 早津(2004:139)における他動詞文のタイプ別の特徴

a.人や事物に働きかけ て動作や変化を惹起 する	a-1 人の意志動作の惹起 (他動詞文が表す頻度：△) 例：恋人を助手席に <u>乗せる</u> 説明：人の意志動作の惹起を表現するのは主に使役動詞である。 他動詞のなかにも表現できるものはあるが、類として狭く、「(家 に)帰す、(校庭に)集める、(部屋に)泊める」のような、人の移 動や配置にかかわる他動詞、多くは形態的に対応する自動詞をも つ他動詞にはほぼ限られる。
	a-2 人の無意志動作(生理変化や心理変化)の惹起 (他動詞文が表す頻度：△) 例：友達を <u>元気づける</u> 説明：人の心理的・生理的变化といった無意志動作の惹起は 日本語にはそれを表す他動詞があまりなく(脅かす、苦しめる、元 気づける、寝かす)、そういった事態の表現には使役動詞が活発 に用いられる。
	a-3 物や事の状態変化の惹起 (他動詞文が表す頻度：◎) 例：風船を <u>割る</u> 説明：物や事の状態変化の惹起は他動詞で表現されることが多 い。使役動詞が用いられることもあるが、他動詞による表現をいわ ば補っているような役割である。
b.人や事物に働きかけ	(他動詞文が表す頻度：◎)

たりかかわったりはする が動作や変化を惹起 しない	例：戸をたたく 説明：対象に変化を生じさせない事態は使役動詞によっては表現 できずもっぱら他動詞によって表現される(「(頭を)なでる、(壁を) ける、(家を)買う」など)。
---------------------------------	-------------------------------------------------------------------------------------------------

早津(2004)の指摘からわかることを他動詞文の特徴に注目して述べると次のようである。

第一、人や事物に働きかけて動作や変化を惹起する場合、他動詞文は人の意志動作(a-1)・無意志動作(a-2)よりも、物や事の状態変化(a-3)を惹起することが多い(上のaから伺える内容)。

第二、人や事物に働きかけたりかかわったりはするが動作や変化を惹起しない類型は、使役文ではなく、他動詞文でのみ表現できる領域である(上のbから伺える内容)。

しかし、早津(2004)の指摘からは以下のような点は考察されず、不明のままである。まず早津(2004)では他動詞文における主語の有情・非情性の違いについては述べられていない。上の<表1>に挙げられている各タイプの例も基本的に主語の部分は明示されていない(恋人を助手席に乗せる)。たとえば早津(2004)では、人や事物に働きかけて動作や変化を惹起する場合、他動詞文は人の意志動作・無意志動作よりも物や事の状態変化を惹起することが多いと述べているが、このような傾向は人主語の他動詞文か非情物主語の他動詞文かで違いはないだろうか。主語の有情性・非情性の違いがどのように関わっているのかについては不明のままである。

次に早津(2004)では、各類型の頻度表示を「◎」「○」「△」のような記号で表示しているが、このような記号がどのくらいの数値・分布を意味するのか明確ではない。用例の統計調査が必要になってくる部分である。

②宮島(1985：335-353)など

次に他動詞の類型(有対他動詞と無対他動詞)と他動性の違いと関連して、他動詞文における結果含意の問題について指摘している研究を紹介する。まず宮島(1985)では結果を含意する他動詞には有対他動詞(「上げる」「壊す」のように対応する自動詞「上がる」「壊れる」をもつ他動詞)が多く、結果を含意しない他動詞には無対他動詞(「食べる」「書く」のように対応する自動詞をもたない他動詞)が多いと述べている。早津(1989、1995：179-197)にも同様の趣旨の指摘がみられる。早津(1989、1995)では宮島(1985)と同様に有対他動詞は結果を含意するもの、無対他動詞は結果を含意しないものと

いう観点から分析しているが、これに加えて、(有対他動詞ではなく)無対他動詞であっても「作る、築く、編む、縫う、織る」などいわゆる「生産」を表す他動詞は結果を含意する他動詞であるとし、複合動詞の中にも「打ち上げる、押し返す、突き落とす、投げ入れる、踏み潰す」など、「無対他動詞(前項)+有対他動詞(後項)」構造を中心に結果を含意する他動詞があると指摘している。

本稿では収集した他動詞文が結果(目的語の動作や変化)を含意するか否かの判断は、以上のような宮島(1985)や早津(1989)の指摘を基準に行う。他動性の側面からいえば、結果を含意する他動詞文は結果を含意しない他動詞文より相対的に他動性が高い文になる。

③熊(2009)など

熊(2009)は、非情物主語の他動詞文の成立要件に関する研究として、シルバースティーン(1976)の名詞句階層説の有用性を文学作品及び新聞社説の用例から検証している。名詞句階層とはシルバースティーン(1976)が豪州原住民語の研究で提唱したもので、名詞句には「人間代名詞(1人称→2人称→3人称)」→「名詞(親族名詞→人間名詞→無生物名詞(自然の力の名詞→抽象名詞))」のような階層が存在し、主語が目的語より階層が高ければ文が自然になるが、主語が目的語より階層が低ければ不自然になるという説である。名詞句階層説では、たとえば「私が猪を殺した」は自然に成り立つが「猪が私を殺した」は自然にならないのは、1人称人名詞「私」は動物名詞「猪」より階層が高いためであると説明する。

熊(2009)によると非情物主語の他動詞文の容認性は基本的に名詞句階層の制約を受けるが、やや特殊なものとして「所属関係の文(小さなクローバーが四枚の葉を広げていた)」「受動的な文(放課後のチャペルは強烈な陽をうけていた)」のように、他動詞文の形式を取っているが自動詞相当の文では、名詞句階層に違反しても(たとえば目的語が主語より階層が高くても)許容されるとしている。

3. 考察

本節では主語の有情・非情性と目的語の結果含意の有無を基準にして、他動詞文を次のように分類して考察する。

Aタイプ(結果含意タイプ)

人や非情物に働きかけて動作や変化を惹起する。

a-1 人の意志動作の引き起し

a-2 人の生理変化や心理変化の引き起し

a-3 非情物の作用や変化の引き起し

Bタイプ(結果非含意タイプ)

人や非情物に働きかけたりかかわったりはするが動作や変化を惹起しない。

本稿の分類は、先行研究で引用した早津(2004)の分類とAタイプ・Bタイプの区別において同一であるが、本稿では主語の有情性・非情性の観点を取り入れた点に独創性がある。以下に人主語の他動詞文と非情物主語の他動詞文における各タイプの分布を示す。

<表2> 人主語の他動詞文と非情物主語の他動詞文における結果含意の様相

タイプ	人主語の他動詞文			非情物主語の他動詞文		
A(結果含意)	42例	a-1	2例	132例	a-1	1例
		a-2	3例		a-2	67例
		a-3	37例		a-3	64例
B(結果非含意)	258例			168例		
全体	300例			300例		

上の<表2>から次のようなことが確認できる。

全体からすると、人主語の他動詞文でも非情物主語の他動詞文でもAタイプ(結果を含意するタイプ)より、Bタイプ(結果を含意しないタイプ)が多くみられる。ただしこれはそもそも日本語にBタイプを形成する無対他動詞の絶対数がAタイプを形成する有対他動詞の絶対数より多いことと関連していると考えられる。早津(1990: 69)によると、『角川類語新辞典』には他動詞が約2010語あるがそのうち有対他動詞は約590語、無対他動詞は約1420語(有対他動詞の約2.4倍)あるという。

ここでむしろ注目すべきことは、人主語の他動詞文と非情物主語の他動詞文におけるAタイプの分布の違いである。人主語の他動詞文でも非情物主語の他動詞文でもAタイプよりBタイプが多いのは共通しているが(おそらく有対他動詞と無対他動詞の絶対数が関与)、相対的な違いとして、非情物主語の他動詞文では人主語の他動詞文に比べ、Aタイプの比重が約3倍も高いということである。このような現象の理由については、以降の節でAタイプの内部を考察しながら探っていく。

3.1. Aタイプ(結果含意タイプ)

本節では、人主語の他動詞文と非情物主語の他動詞文における、Aタイプ(結果を
含意するタイプ)について考察する。順序としては、a-1タイプ(人の意志動作の引き起し)、
a-2タイプ(人の生理変化や心理変化の引き起し)、a-3タイプ(非情物の作用や変化の引
き起し)の順に見ていく。

3.1.1. a-1タイプ(人の意志動作の引き起し)

<表2>から伺えるように、他動詞文では主語が人であるか非情物であるかに関わら
ず、意志動作の引き起しを表す例は非常に少ない。人主語の他動詞文では、300例のう
ち2例、非情物主語の他動詞文では300例のうち1例見られるだけである。

以下にその例を示す。(1)(2)は人主語の他動詞文、(3)は非情物主語の他動詞文にお
ける意志動作の引き起しの例である。

- (1)ヴァラン夫人は彼を司祭にしようと考え、ラザリスト神学校に入れたが、(天才、34)
(2)真由子はそう言って、わたしにメモを見せた。(シュガー、126)
(3)何回かそれ以上眠れないのなら、姉と話でもしに行こうか、と心細く思った。しかし、意
地のような、憎しみのようなものが私を動かさなかった。(体、56)

例(1)(2)では主語の意図的な働きかけによる目的の達成(神学校への進学や視覚的な
活動)を表している。例(3)は非情物主語の文である。この例では、「意地のような、憎
しみのようなもの」が原因として作用している。

本稿の調査では人の意志動作を引き起す他動詞として、「入れる」「見せる」「動か
す」が観察された。先行研究で引用した早津(2004)の説明を見ると、人の意志動作の惹
起を表現できる他動詞として「入れる」「帰す」「集める」「泊める」が挙っている。用
例数を拡大すれば意志動作の引き起しの例も多少増えるかもしれないが、劇的な差は現れ
ないと予想される。すなわち、人の意志動作の引き起しは他動詞文の主な表現領域ではな
いのである。それでは人の意志動作の引き起しはどのような文タイプによって表現されるの
だろうか。それは、使役接辞「(サ)セル」を伴う使役文によって表現される。以下は、人の
意志動作を引き起す使役文の例であるが、主語が要求的な働きかけをして人の意志動作
(「栄子が紙入れを持ってくる」「弁護士がこの件の調査をはじめる」)を引き起している。
このような文は使役文の中でもっとも典型的な使役文に当る。

(4)父は栄子に言いつけて紙入れを持って来させ、盃の酒をひと口飲んでから、「お前に相談があるんだ」と言った。(青春の蹉跎)

(5)星は弁護士に依頼し、この件の調査をはじめさせた。(人民は弱し官吏は強し)

意志動作の引き起しと関連して一つ付け加えたいことは、人の意志動作の引き起しは使役文の中でも「人主語の使役文」によって表現される領域であるということである。使役文であっても「非情物主語の使役文」では、人の意志動作の引き起しは表しにくい。非情物主語は人に作用する際主に、以下の例のように人の無意志的な生理変化や心理変化を引き起す。

(6)实际的な脱出のプランを練るべきだろう。不法行為をなじるのは、そのあとからでいい。ただ、空腹は、意欲を喪失させる。(砂の女)

(7)大学のある街の近くで、彼は薬局にはいり、睡眠薬を一函買った。小さな白い錠剤。それが人を眠らせる。(青春の蹉跎)

3.1.2. a-2タイプ(人の生理変化や心理変化の引き起し)

人の生理変化や心理変化の引き起しの出現頻度は、人主語の他動詞文であるか非情物主語の他動詞文であるかで大きな違いが見られる。人主語の他動詞文では、意志動作の引き起しと同様、人の生理変化や心理変化の引き起しも300例のうち3例とほとんど見られない。しかし、非情物主語の他動詞文では(意志動作の引き起しとは違って)生理変化や心理変化の引き起しは300例のうち67例も見られる。このことから、人の生理変化や心理変化は他動詞文の中では主に非情物主語の他動詞文で表現される領域であることがわかる。

以下の(8)(9)は人の生理変化や心理変化を引き起す人主語の他動詞文、(10)(11)は非情物主語の他動詞文の例である。(9)では人主語が文中に省略されているが1人称の話手であることが予想される。(8)～(11)の例では順に、主語である「彼の何らかの側面」「私(の何からの側面)」「こうした音楽」「突然降り始めた雨」が原因になって「わたしが何かを感じる」「子供が亡くなる」「瞑想に似た精神状態に近づく」「冷たく私が濡れる」という結果を引き起している。

(8)彼は必ずわたしに何かの感じをもたらす。(シュガー、32)

- (9) 「言葉なんて、私は信用しませんね。子供を亡くしたときだって、まわりはさも同情するよ
うなこと言ってるんですよ。(わ、204)
- (10) こうした音楽は、心のなかの波立ちが静まり、瞑想に似た精神状態に近づけてくれま
す。(い、121)
- (11) 突然降り始めた雨はけして恵みの雨でなく、ただ冷たく私を濡らす。(お、150)

ここで、人主語の他動詞文では人の生理変化や心理変化の引き起しが3例しか見られないが、非情物主語の他動詞文では67例も見られることの意味について考えてみたい。これはたとえば、人(たとえば太郎)が他人の生理変化や心理変化を引き起した場合でも、「太郎が花子を傷付けた」と言わずに「太郎が何気なく言った言葉が花子を傷付けた」「太郎のどこか冷めた表情が花子を傷付けた」「太郎の蔑む言い方が花子を傷付けた」のように言う傾向があるということである。もっとも「太郎が言った言葉」「太郎の表情」「太郎の言い方」を「太郎」と完全に分離して考えることはできないとしても、そう表現するには事態把握の違いや特別な表現意図があると考えられる。

「太郎」と言わずに「太郎が言った言葉」「太郎の表情」「太郎の言い方」と表現するのは、その人のどのような側面(外見か、言い方か、行動か、性格か、社会的な地位かなど)が関係したか、何が直接的な原因になったのかを詳細に伝えるとともに、原因を文頭の位置(主題の位置)に置くことで注目させるためと考えられる。

非情物主語の他動詞文を見ると、非情物主語には数えきれないほど多様なものが含まれており、非情物主語の意味と連動して出現する述部事態(生理変化か、心理変化か)もある程度制限を受ける。どんなものがどんな事態を引き起しているのか、主語名詞と述部事態とのパターンが生じるのである。以下に主語名詞と述部事態の代表的な組み合わせを提示するが(全ての組み合わせを網羅したものではない)、非情物主語には、「現象(自然現象、生理現象、その他の現象(光、匂、音))」「具体物」「ある事実や事件」「他人の諸側面(人が言った言葉、人の表情、人の言い方など)」「自分自身の感情や考え」のような類型が設定できる。以下で①と②は人の生理変化を引き起す場合、③と④は人の心理変化を引き起す場合である。

- ①現象(自然現象、生理現象、その他の現象)が人の生理変化を引き起す場合
例：睡眠は、人が生きていくためのエネルギーをつくります。(い、14)
- ②具体物(食べ物、機器、媒体など)が人の生理変化を引き起す場合

例：食用きのこが食中毒を起こすのは何故ですか？(生活、10)

③ある事実や事件、他人の諸側面が人の心理変化を引き起す場合

例：沼のほとりで一度だけ彼女を棒切れでつついて泣かせたことが、その後深い後悔になってわたしを苦しめた。(シュガー、170)

例：こんなふう^に人を誘う時の、彼女の混じりっ気のない一生懸命さは、いつもわたしを元氣付けた。(シュガー、79)

④自分自身の感情や考えがその人の心理変化を引き起す場合

例：感情は光より早く心を満たすが、それは私の内部を照らし出しはせず、ただ私を焼き、目をくらますだけだ。(天・不、33)

上の①と②をみると、「現象」主語と「具体物」主語は人の生理変化を引き起し得る点でひとくくりできるが、これは現象名詞と具体物名詞間に共通点があるためと考えられる。たとえば、「太陽、月、明かり(現象名詞)」と「街灯、車のヘッドライト、探照灯(具体物名詞)」には、「光を放つ、何かを照らす」という共通点が考えられる。また「風、台風(現象名詞)」と「扇風機、エアコン(具体名詞)」には「風力で何かを回したり吹き飛ばす」という共通点がある。「具体物主語：ワインが乾いた喉をしめつける」という実例があったが、主語部分に現象名詞を付け加えて「現象主語：ワインの酸味が乾いた喉をしめつける」に変えても伝える意味はほとんど変わらないのである。そもそも具体物の多くは、自然の力を代替させるために開発されたものでもあり、表面的に具体物主語になっていても突き詰めていくと具体物の作用や機能(現象的な側面)が原因になっているのである。

一方、③と④の「ある事実や事件」「自分自身の感情や考え」名詞群は人の心理変化を引き起す原因になり得るという点でひとくくりできるが、これらの名詞群にも共通点がある。たとえば、「そのスピーチは、多くの人々の心を動かした」という文と「そのスピーチの感動は多くの人々の心を動かした」という文はそれぞれ順に「ある事実や事件」と「自分の感情や考え」が主語になっているが、類似した意味を伝えている。外部の「事実や事件」は人の経験を経て記憶の中に貯蔵されると、その事実や事件に対する自分の「考えや感情」になるためである。

3.1.3. a-3 非情物の作用や変化の引き起し

a-1(人の意志動作の引き起し)とa-2(人の生理変化や心理変化の引き起し)では、目的語に人名詞が来て、人の動作や変化を引き起す他動詞文であった。ここで見るa-3は、

目的語に非情物名詞が来て非情物の作用や変化を引き起すタイプである。

目的語に非情物名詞が来て非情物の作用や変化を引き起すタイプは、人主語の他動詞文では300例のうち37例、非情物主語の他動詞文では300例のうち64例ある。このうち人主語の他動詞文における非情物の作用や変化の引き起し(「太郎が西瓜を割った」「花子が手紙を破った」)は、他動詞文の中で典型的な他動詞文といわれるものであるが、典型的な他動詞文だからと言ってもっとも高い頻度で現れるわけではないということが本稿の調査でわかったことである。

(12)「ありがとうございました、そちらへ伺います」私は電話を切った。(お、27)

(13)私はつらくなって電気を消した。(体、19)

(14)夏から秋へかけての夕焼けも、このあたりをあかあかと染めた。(樹、219)

(15)マスメディアの表面に出てくる言葉は、日米関係の現実を映す。(歴、81)

(12)(13)は人が非情物の作用や変化を引き起す他動詞文、(14)(15)は非情物が他の非情物の作用や変化を引き起す他動詞文である。前者の、人が非情物の作用や変化を引き起す他動詞文では、物の形態・位置・性質の変化、事柄や事態の作用や変化を引き起す。一方、非情物が他の非情物の作用や変化を引き起す場合は、次のような主語と述部事態の組み合わせが見られる。以下に代表的な組み合わせを提示する。

①現象(自然現象、他の現象)が非情物の作用や変化を引き起す場合

例：濁った水が道路を埋め～(悪、126)

②具体物(機械、媒体など)が非情物の作用や変化を引き起す場合

例：左右に雨を散らすワイパーを眺めながら、美加子は深々と息を吐き出した。

(悪、55)

③ある事実や事件が非情物の作用や変化を引き起す場合

例：きっと、性格が明るく前向きになったことが、幸せを招いたのでしょ。 (イ、79)

a-3タイプの主語を、a-2タイプで見られた主語と比べると、a-3非情物の変化を引き起すタイプでは、a-2人の生理変化や心理変化を引き起すタイプでは見られた「(現象名詞のうち)生理現象」と「自分自身の感情や思考」主語は見られない。人の内部で起る「生理現象」や「自分自身の感情や思考」は、その人自身に何らかの変化を引き起す

ことはあっても(a-2タイプ)、非情物の作用や変化を引き起す(a-3タイプ)ことはほとんどないということであろう。たとえば、「生理現象主語の例：慢性ストレスは私の生体リズムに影響を与えた」「自分自身の感情や思考主語の例：彼との思い出は長い間私を苦しめた」とは言えても、「慢性ストレス」「彼との思い出」がその人と無関係な非情物に影響を与えることは現実世界でも起りにくいのである。

以上、主語が目的語に働きかけて何らかの結果を引き起すAタイプ(a-1、a-2、a-3)について考察した。ここで本章のはじめの部分で述べた人主語の他動詞文と非情物主語の他動詞文におけるAタイプの出現頻度の格差の問題に戻りたい。まず、Aタイプのうちa-1(意志動作の引き起し)については人主語の他動詞文でも非情物主語の他動詞文でも用例数が非常に少なく大きな違いは見られないためしておく。次に、a-2人の生理変化や心理変化の引き起し及び、a-3非情物の作用や変化の引き起しについては、非情物主語の他動詞文では人主語の他動詞文に比べ用例数が圧倒的に多い。それぞれ順に3例：67例そして、37例：64例の差である。

本稿ではAタイプの出現頻度に大きな差が見られる理由を、非情物主語の他動詞文におけるAタイプ(特にa-2とa-3タイプ)の意味構造から探りたい。a-2とa-3タイプは無意志的な事態を引き起す非情物主語の他動詞文として、因果関係を表す意味構造であるという共通点がある。因果関係を表現する形式には様々なものがあるが、その大半は「～から」「～ので」「～ため」「～して」など従属節を伴う複文の構造である。因果関係を表す表現形式のうち、非情物主語の他動詞文固有の特徴といえるのは、①原因(主語)が文頭に来て文の主題になり得るということと、②(従属節を伴わなくても)単文構造で因果関係を表現できるということである。結果(どうなったか)より原因(何が引き起したか)に焦点をあてたいとき、そして単文構造を持って因果関係を表現したいとき、a-2とa-3タイプのような非情物主語の他動詞文が選ばれるのではないだろうか。p.10-11に因果関係の代表的なパターンを提示したが、主述関係を用いて因果関係を表現する意味構造としての表現的価値が非情物主語の他動詞文でAタイプ(特にa-2とa-3タイプ)が多い理由と相関していると考えられる。

3.2. Bタイプ(結果非含意タイプ)

Bタイプは主語が目的語に働きかけたりかかわったりするが結果を引き起さないタイプである。Bタイプは人主語の他動詞文では300例中258例、非情物主語の他動詞文では300例中168あり、いずれの他動詞文でも多数派であるが、特にそのような傾向は人主語の他

動詞文で目立つ。他動性の観点から言えば、結果を含意しない他動詞文が結果を含意する他動詞文より他動性が低いため、BタイプはAタイプより他動性が低いことになるが、全体における出現頻度はAタイプより高いというわけである。典型的な他動詞文だからと言って出現頻度が最も高いわけではないことを先述したが、他動詞文の典型性と出現頻度は必ずしも比例していないことがわかる。

非情物主語の他動詞文におけるAタイプは主語が原因になって述部事態を引き起し、主語と述部が広義の因果関係で結ばれていた。一方、結果を含意しないBタイプでは因果関係は成立しないため、主語と述部の組み合わせのパターンを取り出すことは有効ではない。ここでは人主語の他動詞文と非情物主語の他動詞文の相違に注目して、同一の動詞が人主語を取るか非情物主語を取るかで意味の変化(意味の拡大、抽象化、比喩化など)が見られる現象に注目する。本稿の考察結果、人主語を取るか非情物主語を取るかで意味の変化が見られる現象は、Bタイプの「呼ぶ」「包む」動詞で目立っており、以下ではこれらの動詞を中心に考察する。

①呼ぶ

人主語を取るか非情物主語を取るかで意味の変化がみられる代表的な動詞にまず「呼ぶ」がある。「呼ぶ」は発話・伝達を表す動詞として基本的な意味は「相手の注意を引くために声をかけること」である。ただし、このような意味は人主語の他動詞文でのみ実現される意味である。「呼ぶ」は以下の例のように非情物主語を取ると「声をかける」という意味は表せなくなり、「何かを引き起す・生じさせる・もたらす」のような出現・発生の意味に変化する傾向が見られる。(16)は基本的な意味で用いられている人主語の他動詞文、(17)(18)は出現・発生の意味を伴っている非情物主語の他動詞文の例である。

(16) 「いずみさん」 そう呼ばれて振り返っても、彼が私を呼んでいることなんてなかった。

(お、184)

(17) 健康な生活が、旺盛な食欲ばかりを呼んでいる。だが、毎朝、毎晩の食事の献立も、ほとんど変わらない日々が続いていた。(悪魔、109)

(18) 窓を開けたら冬の凍りつくような風がさっと入ってきて、眠れない熱気のこもった部屋に新しい一日を呼び込んでしまった。(体、125)

本稿の用例にはなかったが、「感動を呼ぶ」「共感を呼ぶ」「幸運を呼ぶ」などの組

合わせは、主に非情物名詞を主語に取り、「引き起す・生じさせる・もたらす」の意味で用いられるものである。

発話・伝達動詞には「呼ぶ」の他にも「伝える、語る・物語る、喋る、叫ぶ、叱る、誉める、唱える、述べる、おっしゃる」など様々な動詞があるが、人主語を取るか非情物主語を取るかで「呼ぶ」ほど意味の変化が目立つ発話・伝達動詞はない。

その理由について考えるとまず、発話動詞の中にはほとんど人主語しか取れないものがある。「喋る、叫ぶ、叱る、誉める、唱える、問う」などは人のみが持っている性質を発現させながら発話・伝達を表す動詞である。例えば「喋る」は人が口数多く言う様子に焦点があてられており、「叫ぶ」は恐怖や驚きなど人の感情から声を出すことである。「誉める、叱る」も意見・感情を表出する人の態度である。「述べる、おっしゃる」などは文体的な要因(話し言葉か書き言葉か、丁寧な文体か普通の言葉遣いかなど)が関係して、非情物主語はとりにくいものと考えられる。一方、「伝える、語る・物語る」のような動詞は非情物主語の例がしばしば見られる動詞であるが、人主語を取るか非情物主語を取るかで意味の変化はそれほど大きくない。

(19)電線に止まるカラスや、見たこともない鳥達。昆虫や、こんな都会にも花を咲かせる植物達。小さな窓なのに、その四角い空間は僕にいろんな情報を伝えてくれた。(ピ、105)

(20)わが国の知識人の間でさえ、セレンディピティということばをきくことがすくないのは、創造的思考への関心が充分でないことを物語っているのかもしれない。(思考、67)

一般的に多義語は文型と意味間の多様性によって成立することが多い。例えば「食慾が進む」は「～が進む」の文型で「進展」のような意味を、「大学に進む」は「～に進む」の文型で「進学」のような意味を表す。そのような観点から「呼ぶ」を眺めると、人主語を取るか非情物主語を取るかで基本文型「(～に) ～を 呼ぶ」が変わるわけではない。意味の変化のみが観察される。

②包む

人主語を取るか非情物主語を取るかで意味の変化が観察される次の動詞として「包む」がある。「包む」動詞は、非情物主語の他動詞ではもともと頻繁に出現する動詞の1つである。本稿の調査結果、人主語の他動詞文の中では「包む」動詞の例が2例に

過ぎないが、非情物主語の他動詞文では16例にもぼる点は注目に値する。

「包む」動詞の基本意味は「紙や布などの中に物を入れて覆う」ことであるが、このような意味は人主語の他動詞文でのみ実現される。非情物主語の「包む」文を観察すると、「現象や自分自身の感情(霧、湯気、寒気、空、黄色い夕日、草の匂い、雪の匂い、歓声、悲しみ、愛)が、人や人の周囲を取り囲む」のような意味で用いられる。基本的な意味から、意味の変化(意味の拡張、抽象化、比喩化)が起っているものと考えられる。以下に例をあげるが、(21)は人主語の「包む」文、(22)~(24)は非情物主語の「包む」文の例である。

(21) 訳もなく震え始めた右手を私は左手で包み込んだ。ここで堪えなければ。。。

(M、59)

(22) 湯気が彼女の表情をベールのように薄く包んだ。(シュガー、123)

(23) 寒気が全身を包んだ。(限り、130)

(24) 慶子はそんな父親を見ると、日本での彼の長い歳月の悲しみがその周囲にただよって泰明を包んでいるような気がした。(樹、91)

非情物主語の他動詞文の中でもっとも高い頻度で「包む」がその領域を構築していくことには、このような「包む」の意味の変化が影響しているといえる。

4. むすび

他動詞文をめぐる多くの研究がなされているが、主語の有情・非情性を軸にした他動詞文間の比較分析は充分になされているとは言えない。本稿では日本の文学作品、社会書籍から人主語の他動詞文300例と非情物主語の他動詞文300例を収集し、他動詞文間の比較分析を行った。

考察においてはまず目的語の結果含意の有無を基準にして、Aタイプ(結果含意タイプ)とBタイプ(結果非含意タイプ)に大別し、Aタイプについては人の意志動作の引き起し(a-1)か、人の生理変化や心理変化の引き起し(a-2)か、非情物の作用や変化の引き起し(a-3)かに分けて分類した。考察結果、人主語の他動詞文でも非情物主語の他動詞文でもAタイプよりはBタイプの例が多く見られたが、相対的な違いとして非情物主語の他動詞文では人

主語の他動詞文に比べ、Aタイプの例が約3倍も多かった(42例対142例)。特にこのよう傾向は、a-2タイプとa-3タイプの出現頻度の差に現れた。

Aタイプの出現頻度にこのように大きな差が見られる理由については、Aタイプ(特にa-2タイプとa-3タイプ)の意味構造である因果関係の構造から探った。他の因果関係形式と違って、主述関係を用いた構造は、原因を文頭に置いて注目させることができ、単文構造でも因果関係が表現することができるという特徴があった。本稿ではこのようなAタイプのパターンを提示し、人の生理変化を引き起し得る主語タイプとして「現象」と「具体物」主語の連続性、人の心理変化を引き起し得る主語タイプとして「ある事実や事件」と「自分自身の感情や考え」主語の繋がりについても述べた。

一方Bタイプにおいては、他動詞文の典型性の度合いと他動詞文の出現頻度は比例していないことを指摘し、人主語を取るか非情物主語を取るかで意味の変化(意味の拡大、抽象化、比喩化)が観察される代表動詞として「呼ぶ」と「包む」を取り上げた。具体的には「呼ぶ」が「相手の注意を引くために声をかける」基本意味から「何かを引き起す、生じさせる、もたらす」の出現・発生の意味に変化する様相及び、「包む」が「紙や布などの中に物を入れて覆う」意味から「現象や自分自身の感情が人や人の周りを取り囲む」意味に変化する様相について検討した。

【参考文献】

- 青木博史(2006)「原因主語他動文の歴史」『筑紫語学論叢Ⅱ-日本語史と方言-』、筑紫国語学談話会編、pp.274-293.
- 金子尚一(1990)「非情物主語の問題から」『国文学解釈と鑑賞』55-7、至文堂、pp.36-46.
- 佐藤里美(1990)「使役構造の文(2)-因果関係を表現するばあい-」『ことばの化学』4、むぎ書房、p.103-157.
- 角田太作(1991)『世界の言語と日本語』、くろしお出版、pp.39-61.
- 外山滋比古(1973)『日本語の論理』、中央公論者、pp. 24-30.
- 早津恵美子(1989)「有対他動詞と無対他動詞の意味上の分布」『計量国語学』13-5、計量国語学会、pp.353-364.
- _____ (1990)「有対他動詞の受身表現について」『日本語学』9、明治書院、pp.67-83.
- 早津恵美子外(2004)『朝倉日本語講座 6 文法Ⅱ』尾上圭介編、朝倉書店、pp.128-150.
- 藤井正(1971)「使役」『日本文法大事典』松村明編、明治書院、pp.281-282.
- 宮島達夫(1985)「ドアをあけたが、あかなかった」『計量国語学』14-8、計量国語学会、pp.335-353.
- 吉田金彦(1971)『現代語助動詞の史的研究』、明治書院、pp.70-78.

熊鷹(2009)『鍵がドアをあけた』、笠間書院、pp.12-94.

Silverstein, M.(1976) "Hierarchy of features and ergativity : In Dixon, pp.112-71.

【用例出典】

- 『悪魔の羽根』乃南アサ、新潮文庫、2004 (悪)
- 『イヤなことをスッキリさせて眠る本』小池能理子、KKベストセラーズ、2003 (イ)
- 『おしまい』の時間』狗飼恭子、幻冬舎文庫、1997 (お)
- 『限りなく透明に近いブルー』村上竜、講談社文庫、1978、2004第74刷り (限り)
- 『体は全部知っている』吉本ばなな、文春文庫、2020 (体)
- 『思考の整理学』外山滋比古、筑摩書房、1986、2008第46刷り (思考)
- 『シュガータイム』小川洋子、中央公論新社、1994、2004第9刷り (シュガー)
- 『樹影』佐多稲子、講談社、1988 (樹)
- 『天才たちの不思議な物語』桐生操、PHP研究所、1998 (天・不)
- 『天才の読み方』斎藤考、大和書房、2003 (天才)
- 『ピアノシモ』辻仁成、集英社、1992、2001第24刷り (ピ)
- 『MISSING』本田考好、双葉社、2001、2004第32刷り (M)
- 『歴史をかえた誤訳』鳥飼玖美子、新潮社、2004 (歴)
- 『われら冷たき闇に』藤堂志津子、講談社文庫、2000 (わ)

以上の他に、比較・対照のために用いた使役文の例(4例)は、新潮文庫100冊(1995年)CD-ROMから収集したものである。

논문 투고 일자 : 2020. 03. 30.
논문 심사 일자 : 2020. 04. 24.
게재 확정 일자 : 2020. 04. 24.

 <要旨>

主語の有情・非情性と他動詞文の表現事態

崔瑞暎

本稿では日本の文学作品、社会書籍から人主語の他動詞文300例と非情物主語の他動詞文300例を収集し、他動詞文間の比較分析を行った。

まず目的語の結果含意の有無を基準にして、Aタイプ(結果含意タイプ)とBタイプ(結果非含意タイプ)に大別し、Aタイプについては人の意志動作の引き起し(a-1)か、人の生理変化や心理変化の引き起し(a-2)か、非情物の作用や変化の引き起し(a-3)かによって分類した。考察結果として、人主語の他動詞文でも非情物主語の他動詞文でもAタイプよりはBタイプの例が多く見られたが、相対的な違いとして非情物主語の他動詞文ではAタイプの例が約3倍も多かった(42例対142例)。

Aタイプの出現頻度に大きな差が見られる理由については、主述関係を用いた因果関係の表現形式は、原因を文頭に置いて注目させることができること、単文構造でも表現することができることを指摘した。本論ではこのようなAタイプのパターンを考察し、人の生理変化を引き起し得る主語タイプとして「現象」と「具体物」主語の連続性、人の心理変化を引き起し得る主語タイプとして「ある事実や事件」と「自分自身の感情や考え」主語の繋がりについて述べた。一方、Bタイプについては、他動詞文の典型性の度合いと出現頻度は比例していないことを指摘し、人主語を取るか非情物主語を取るかで意味の変化が観察される代表動詞として「呼ぶ」と「包む」を取り上げた。

Subject animacy and transitive sentence expression

Choi, Seo-Young

In this paper, we collected examples of 300 animate subject transitive sentences and 300 inanimate subject transitive sentences from Japanese literary and social books, and compared their characteristics.

Based on the presence or absence of result entailment of the object, the sentences were divided into type A (result entailment) and type B (result non-entailment). Type A was further classified as cause of human action (A-1), change in human physiology or psychology (A-2), and change in an inanimate object (A-3).

There is a significant difference in the appearance frequency of type A due to the causal relation expression form using the relation between the subject and the predicate. In this structure, the cause was placed at the beginning of the sentence so that it could be focused on and so that the causal relationship could be expressed in a short sentence structure.

We considered type A patterns such as subject types that cause changes in human physiology and the continuity of “phenomena” and “concrete” subjects, and subject types that cause human psychological changes, connections between the subject of “a fact or case,” and “one’s own feelings and thoughts.”

For type B, we pointed out that the degree of typicality of transitive sentences is not proportional to the frequency of transitive sentences. Next, we considered “Yobu” and “Tsutsumu” as a representative verb that causes a change in the meaning.